

潟端地区での能の公演合宿

一橋観世会・二松学舎大学中所ゼミ

一橋観世会 森田 義旦

二松学舎大学中所ゼミ 伊東 花那

昨年8月6日から10日の5日間にかけておこなった佐渡市潟端地区での合宿について、その活動内容や歴史、今後について発表した。

1. 団体紹介

本合宿は、一橋観世会と二松学舎大学の中所ゼミ合同でおこなった。

一橋観世会は能を稽古、公演する一橋大学の部活動で、当団体OBで観世流シテ方能楽師である津村禮次郎師と中所宜夫師の指導のもと活動している。二松学舎大学中所ゼミは二松学舎大学文学部に属し、前述の中所宜夫特任教授のもとで能の実技を研究するゼミナールである。以前は津村禮次郎師がこのゼミナールを担当しており、両団体の親交は長きにわたり続いている。今回の合宿では、学生はこの2つの団体合計で12名が参加した。

2. 活動のきっかけ、変遷

この合宿が始まったきっかけとして、津村禮次郎師と佐渡島の関わりが大きく影響した。

津村禮次郎師は1970年ごろから佐渡島を来訪し、その2年後1972年から一橋観世会の学生を連れて佐渡で合宿を行うようになった。当初は小木、また真野町大膳神社を拠点に合宿活動をおこなったが、1986年から潟端諏訪神社を拝借して合宿をおこなうようになり現在に至る。合宿最終日に成果発表を能舞台でおこない、地域の小学生の仕舞発表や鬼太鼓の実演など地域の方々のご参加もいただくことで、交流も盛んとなった。「ふれあい薪能」と名付けられ、終了後には潟端地区の方々やご支援いただいた方の厚意により祝宴が開催されるようになった。

コロナ禍で中断となっていたが再開し、一橋観世会と二松学舎大学中所ゼミの合同でおこなうようになった。

3. 活動日程、内容

8月6日から10日の5日間にわたり活動をおこなった。活動内容として、稽古、地域の方々との交流、ふれあい薪能、観光が主として挙げられる。ここでは時系列順に各内容を述べる。

1 日目夜から 3 日目昼ごろまで、師匠の指導のもと稽古をおこなった。日中は瀉端諏訪神社の能舞台を稽古場として使用させていただき、夜は宿泊場所である瀉端地区交流館で稽古をおこなった。瀉端諏訪神社の能舞台は本合宿でしか使用されておらず、地域の方々の長年の尽力によって保たれている。稽古の前には掃除をし、日々の活動とは異なる能に集中できる環境の下で学生一同感謝の気持ちを持ちながら稽古に励むことができた。

2 日目と 3 日目の夜は、交流館で地域の方々も交えて夕食を取った。自炊した料理だけでなく、地域の方々に差し入れいただいた食材をいただきながら、地域の方々と交流できた。

3 日目は午前中の稽古後、車で観光に行った。今回は学生の「佐渡の自然を感じたい」という希望のもと、尖閣湾の観覧船に乗ったり山上の展望台に登ったりして佐渡の自然を満喫できた。

4 日目の夜に瀉端諏訪神社で「ふれあい薪能」をおこなった。学生が各人稽古した仕舞を舞ったあと、地域の高校生の方々の鬼太鼓を鑑賞させていただいた。その後、津村禮次郎師が半能「巴」を舞われた。神社には 10 人ほど地域の方々にお越しいただいた。学生にとって「薪能」は佐渡合宿でしか経験できないものであり、貴重な機会になった。その後は地域の方々が料理などを用意してくださり宴会をおこなった。

4 今後に向けて

今後の主な課題は、地域の方々と学生の交流の活性化である。現在、上記の通り夜の宴会で地域の方々との交流を行っているが、学生と地域の方々がより積極的に交流すればさらに合宿の充実度が増すと考えられる。能が古くから地域文化に根付いている佐渡島で、地域の方々と直接交流する機会が増えればより一層佐渡への理解が深まり、また瀉端地区との関係性も深まるだろう。本合宿を今後も続かせるために、交流の活性化を図ることが重要だと考えられる。